北支

正月

事變下五度目の正月である、世界未曾有の動亂渦中、日本の危機は亦痛烈なる實感を以て我等に迫つて來た。この時友邦中國の正月風景は如何に繰展げられるか、それは東亞新秩序建設の一貫した理念の下に、靜肅乍ら輝かしい希望を孕む、烈風の中の黎明である

十二月二十三日竈祭、送竈ともいつて竈神の昇天を送るのである。この竈神は天上の玉皇大帝から派遣された一家の守護と監督を兼ねた神で、此夜昇天して家族一年間の善惡功罪を報告なさると謂ふ。それで竈を清掃して供物をするのであるが、供物の主體をなす飴玉は報告の際に竈神の口が粘つてあまり惡口を云はれぬやうとのまじなひだ（玉皇大帝とは道家の作るところ、天地人界宇宙一切の主宰者たる至上神）

かくて此夜昇天した竈神は一週間後元日の早朝にその家一年の運命を携へて諸神と一緒に下界される。その間除夕迄は神無しの時期で、各戸正月の仕度に忙しい。商店は書入時と歳暮賣出に店を飾り立てる

正月準備の買物はまづ竈神と門神の繪像、天地百神の像、春聯など。それから燈籠提灯の類、餃子、（肉饅頭）の材料、線香、爆竹、等々。除夜ともなれば家庭內外の飾付、馳走の準備を終へ、徹宵して眠らず、これを守歳と云ふ。十二時過ぎると庭に出て爆竹を打鳴らし吉方に向つて百神の像（即ち百分）を中庭に祭つてこれを迎へ（接神）新年となる

次に屋內の儀式は先づ臺所に竈神を拜迎し、祖先の靈を拜し、終つて家族の者、年少者より年長者へ新年の祝辭を述べ、やがて一家團欒して御馳走を食べ、椒柏酒を飲む。夜が明けると出行と云つて廟に詣る

二日は財神（福の神）を祭る日で商家は大切の儀式だ

八日は星祭、今でも古式の家庭では百八ツの燈明をあげて星神を祭る

十五日の夜を元宵と云ひ、この夜を中心に前後數日の間、華やかな燈籠を點して賑やかな夜が續く

この元宵は昔一年最初の滿月の夜として尊ばれ、月に對して一年五穀の豐穰を祈るところから燈籠節に發達したもの。即ち上元の日、七月十五日を中元十月の十五日を下元と定め、上元は天官福を賜る日、中元は地官赦罪の日、下元は水官の水火の災厄より救ひ給ふ日とする

とまれ元宵は一年中に最も樂しい正月の締めくくりとしてハメを外して大いに遊ぶ

歳末風景・年糕（日本の正月餅に當る）を賣る

Dawn of the New Year in North China

歳末風景・子供を伴れてお正月の買物に

初市と歳暮賣出し

正月の2

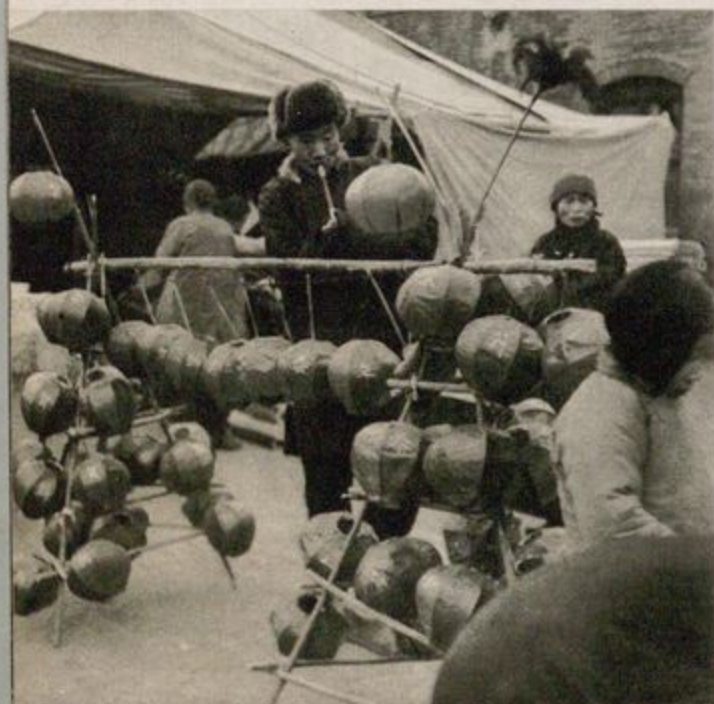
First Market of the Year

1 世界に名高い北京琉璃廠の初市
2 歳末風景・噗々登の玩具を賣る
3 歳末風景・錢の生る樹と紅蝙蝠を賣る
4 歳末風景・泥娃々と小狗兒を賣る
5 正月風景・飴菓子、玩具いろいろ
6 歳末風景・めでたい紅提灯を賣る

5

6

7

7 歳末風景・花炮（爆竹の一種）を賣る

大晦日

正月の3

The New Year Eve

踏歳用の胡麻稈

中庭で爆竹鳴らし神迎へのこと

門神も掛錢も飾り終へて

年畫（正月壁飾用）も賣切れ近い

街頭風景

正月の4

凧賣る下で繪草紙を借りて讀

New Year Street Scenes

慌しい中にもシンとした歳末・廻り燈籠

屋根

後園

Chinese Mansions

支那の住宅 一

（室内寫眞竝びに花墻、廊下を除き）

坂本萬七撮影

支那に於ける一般住宅は古來より現代に至るまで大した變化がなく、北京あたりに殘存する清末の建築も格別の時代的特色と思はれるものは無い。多くは周圍を高く圍ひ、大門内には影塀を立てて宅内の見透しを防ぎ、院子（中庭）を圍つて棟を並べ、大家になると奥の方へ幾つも院子をおいて棟を建てすべて左右均勢を嚴守した支那建築の原則を出てない。主人の寢を大房、夫人の寢を後照房、横手に配した家を廂房、繋ぎ廊を遊廊といふ。間取りは一文字型で、中央を土間とし、左右に炕を具へた數室を配するものもある

農家でも大體この原則を略化した程度である

院子を庭、後園を園といふ。庭には塼を敷き、太湖石、盆栽を配し、園には池、山等を造る

寫眞は廊下、花墻、室内を除き全部每號讀物頁で御馴染の可園雜記主人の邸宅である

院子

支那の住宅 二

Chinese Mansions

垂花門、柱の前に座せる門枕石

花墻（壁）

屋根

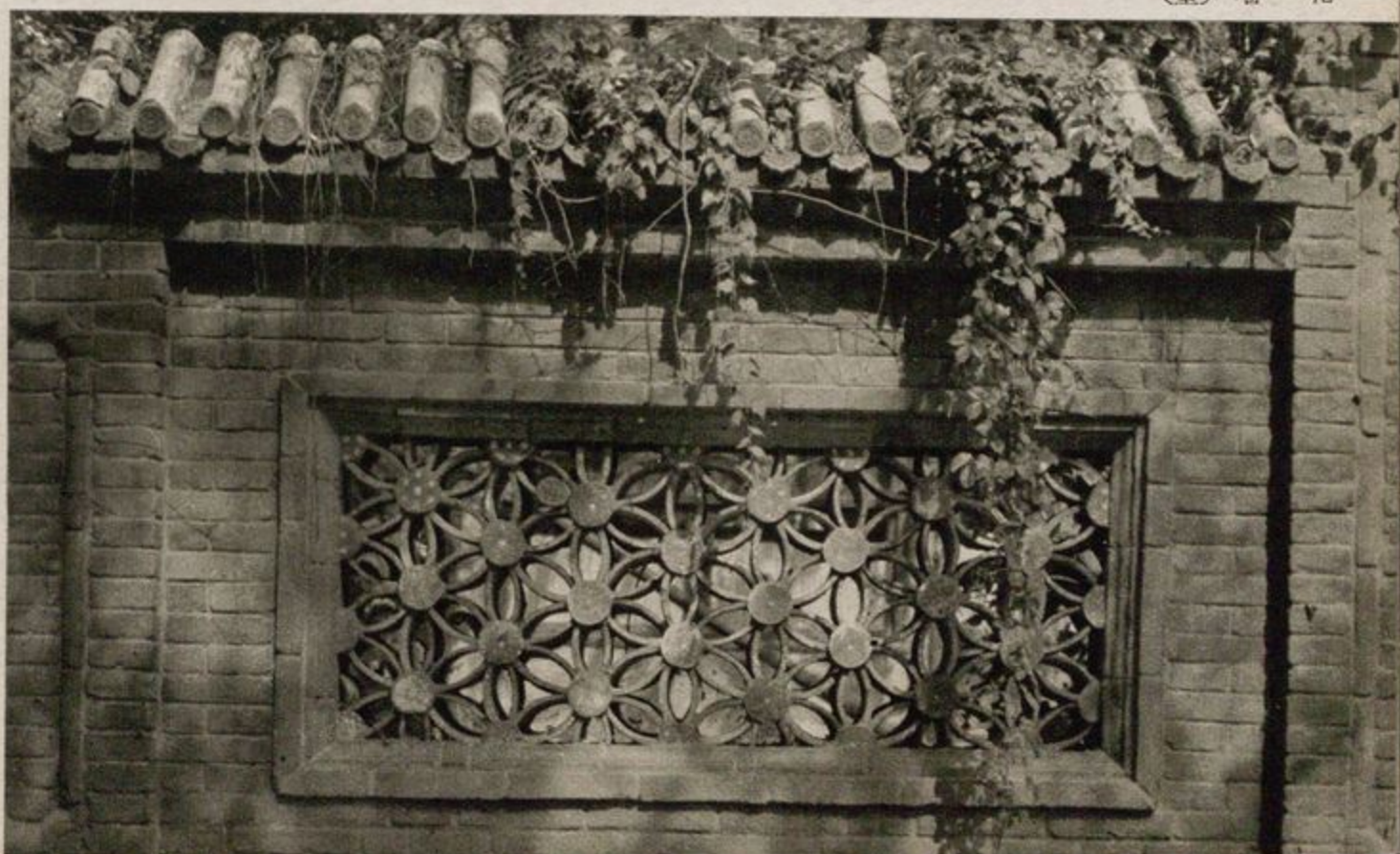
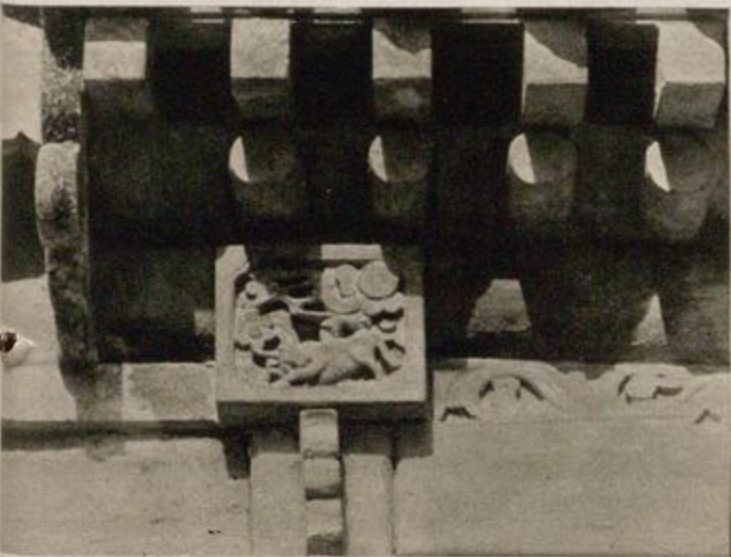
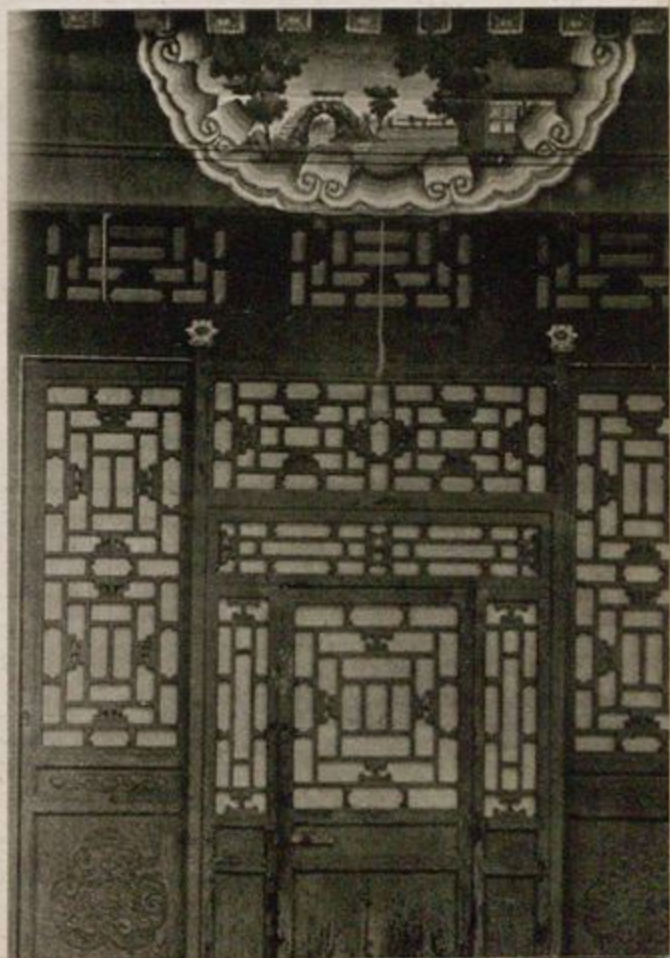
支那の住宅 三

Chinese Mansions

長廊

軒下の花塼

花隔子

室內・彫花格扇（中の丸い仕切り）

第一洞西壁

雲崗石佛

坂本萬七撮影

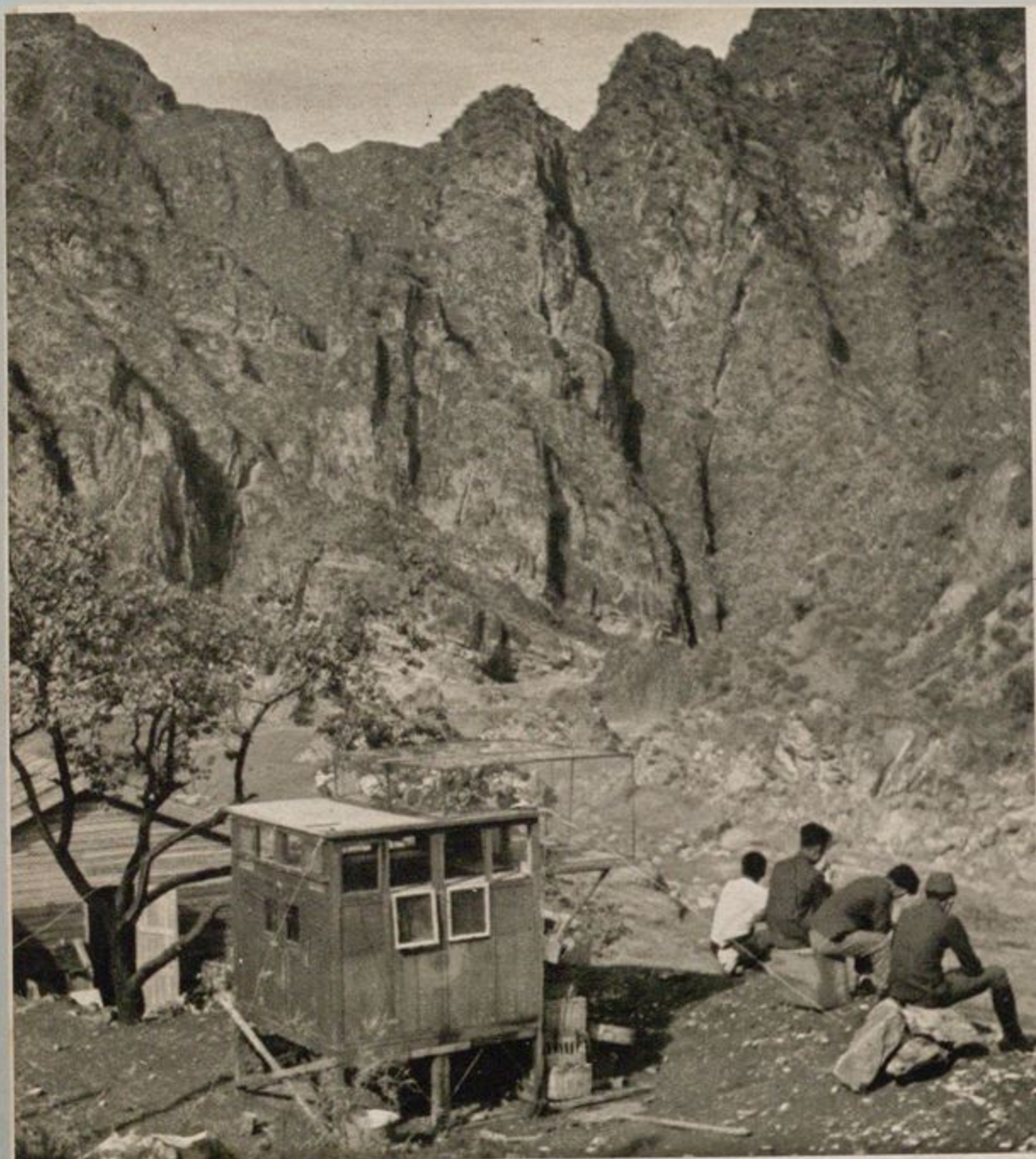
大同は世界的な佛教藝術の都である。即ちその石佛はこの種藝術品に於て世界に比肩し得るものがないといはれる石佛は大同城の西方十八軒の地點、雲崗鎭或は雲崗堡と稱する一農村にある明治三十六年、我が伊東忠太博士の發見以來、世界に喧傳せられ始めた。武周川と稱する流を前にした、砂岩の水平層から成る石崖に、東西二千米に亙つて約二十の石窟と無數の小佛龕とが建造開鑿せられてある

北魏文成帝の興安二年（皇紀一一一三年）沙門曇曜が開鑿を始め、孝文帝の太和十七年（皇紀一一五三年）洛陽遷都に至る迄四十年間に亙つて行はれたが、その後、隋、唐の時代に開鑿せられたものもある。北魏時代のものは、北魏歴代帝室の事業として祖先の供養或は祈願のため、信士信女を擧げ、即ち國家の事業としていとなまれたものと謂はれてゐる。從つてその規模も大きく、高さ七十尺に達する像があり、三千人を容れるに足る洞窟もある。然し大同の石佛のよさが規模の大のみにあるのではなく、その神鑿の跡にあること勿論ではあるが、孰れにしても、この北邊の地に、漢人ならぬ塞外民族の王朝の力に依て、このやうに偉大な彫刻が生まれ、千五百年の兵亂と風霜に堪へて今日に遺されてゐる事實は、驚嘆に價する

第十六洞入口

鐵道新線建設

敏速なる機動力を基底とする近代戰の遂行に鐵道が不可缺の要素であることは謂ふまでもない
支那事變勃發以來、今日の如く戰果を擴大せしめ得たのは交通運輸力の整備に負ふところ最も大であるとされてゐる。事變當初においては何よりも先づ敵の破壞し去つた鐵道の復舊と確保とが戰鬪遂行上緊急の問題であつた。その後占領地域の擴大と事變の長期化に件ひ、鐵道は更に治安の維持、經濟資源の開發の動脈として益〻その重要性を加へるに至り、東亞自立經濟確保のため幾多の新線計畫が進められた。しかしこれらの新線建設は決してなまやさしい事業ではなかつた
一例を擧げれば昭和十三、十四年の二箇年に亙つて北支、蒙疆を襲つた大水害の如きは戰爭の爲の直接被害とは比較にならぬ大損害を鐵道線路にも與へたのである。氾濫地區面積は約四萬九千平方キロで我九州の總面積の約一・二倍に及び、北支鐵道の被害延長は百六十キロ、全線殆んど切斷の慘狀を呈し、平均一キロ當り三十九メートルの被害を蒙つたのである。その件數は橋梁線路築堤の流失、線路埋沒及び浸水路盤沈下、土砂崩壞等、實に七百數十件に達した

かやうなきびしい自然の暴威に加へて一方には執拗なる敵匪の妨碍が絶えずまた物的人的資材の不足を告げるなど二重、三重の困難な條件の下にその建設は進められたのである。事變以來一千名に近い鐵道從業員が國策の尖兵として殉職してゐる。つまり文字通りの軍鐵一致の血みどろな建設作業が續けられてゐるのである

通信補助として傳書鳩も活躍する

New Railway Lines under Construction

事變以來の新設鐵道は左記の通り既に一千キロに垂んとしてゐる

京古線（北京―古北口）一二〇キロ
同蒲線（朔縣―原平）一〇四キロ
新開線（小冀―開封）八七キロ
東潞線（東觀―潞安）一八〇キロ
石德線（石門―德縣）一八〇キロ

その他事變以來建設されたものは包頭―石拐子、博山―八陡、門頭溝―大寨、口泉―永定莊、軒崗―石灘、馬頭―西佐、蔣村―史家崗、東太平―赤柴、柳泉―柳泉炭礦など何れも短距離ではあるが、石炭資源開發に重點を置いたものであり、聖戰四年凡ゆる困難を排除しつつ着實に伸展せしめられてゐる。なほこれらの新建設線の外に目下工事中のもの、或は計畫中のものも少くない

大河をよこぎつて鐵道建設部隊は進む

鐵道新線建設 二

新線建設地となつた部落は新らしき土地に移動する

匪襲の多い建設地には

泥沼にはまりこんだ馬を引きあげる

資材もトラック

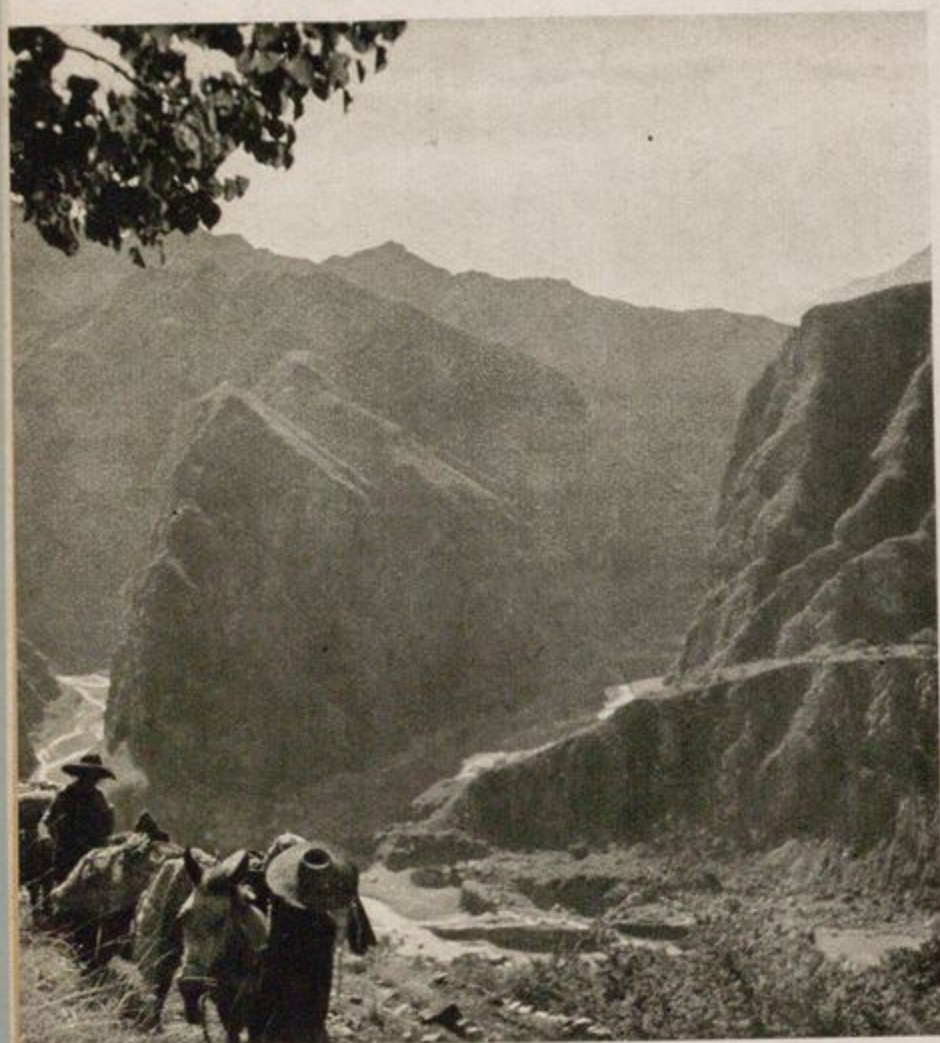
急遽假橋も架けられた

厖大な警備員が配置される

えいえいと急坂を登る資材を背にした苦力

によつて到着した

東亞共榮圏の期待する

北支の資源 一

Natural Resources of North China
within the East Asia Co-Prosperity Zone

我日本はいとも惠まれたる國である。

しかしながら近代産業特に重工業資源に就いては餘りにも惠まれてゐない。國内資源のみを以てしては日本及日本民族が大をなすことが出來ないのである。之は誠に遺憾と云へば遺憾であるが、恐らくは大陸を經營せよとの神意でもあらう。而して今次の事變を機として開かれた民族活躍の大舞臺たるアジア大陸就中北支及蒙疆には我日本の必要とする重要資源の幾つかが莫大に包藏され生産されつつある

先づ鐵と石炭とを主として、アルミニウム原料としての礬土頁岩、鹽、棉花羊毛、金、タングステン、マンガン等を擧げることが出來る。大ざつぱに見積つて石炭は一千七百億トンといふ誠に驚異的數字を示してゐる。しかし有るといふことは無いといふことに等しいのである。資源が資源としての價値を發揮するためにはそれが需要地に輸送されるといふことを前提とする。自然にあるものをして價値あらしめること、天然資源をして人類のものたらしめること、之には大量且つ低廉なる運輸を可能ならしむるところの高度交通機關を不可缺の條件とするのである。

由來僻遠の地として人烟稀薄の儘に放置せられた滿洲が經濟的意義と價値をもつやうになつたのは今を去ること三十數年前日露戰爭の結果として南滿洲鐵道會社が日本の手によつて設立されて以來のことであり、滿洲の歴史は日本の鐵道經營、卽ち滿鐵を根幹とする産業文化の開發に依て新なる時代を劃し、遂に滿洲建國の大業を見るに至つたのである

古來、偉大なる建業には必ず交通の問題が重視せられてゐる。羅馬の西方世界經營は所謂ローマンロードの建設に始まり、その結果として世界の道は羅馬に通ずるといふことになつたのである。唐の東方世界經營も亦、同樣で、道は長安に通ずと謂はれた所以がそこにある。現在世界の富の大半を有し、世界平和の鍵を握るものだと大きな顔の出來るアメリカ合衆國は、初め河蒸汽によりついでは鐵道によつて開發し建設されたものである。これら交通網の整備發展なくして現在の合衆國といふあの厖大な大陸國家の建業は全く不可能であつたらうと思はれる

世界の歴史の訓ゆるところ、洋の東西と時の古今とを問はず、交通の問題を離れたる大業はない。我等が今日の大陸經營、アジア興隆の大理想の前に交通の整備は最大の問題として採り上げられねばならないのである。昭和十四年四月十七日華北交通會社の設立を見たのは實にその意味からである

現在華北交通會社は十一萬の從業員の中に三萬餘の日本人が指導的立場を採り、その知識經驗を傾注して、科學的綜合的經營に依る交通機能の全的登場に努力しつつある。現在同會社が經營する鐵道は大凡六千キロ、自動車路線は華北に於いて一萬三千キロ、水運は四千二百キロに及んでゐる。又之等交通運營の傍ら、沿線住民のため愛路村工作を行ひ、中國人子弟のため扶輪學校を經營するなど中國大衆に直接の福祉をも與へてゐる。卽ち日支提携の最も代表的な仕事を實際にやつてゐるわけて、日本の主唱する東亞新秩序建設の大業に對して、この會社が負ふべき役割は極めて重大である。事變以來この聖業に携つて名譽の殉職を遂げた交通從業員は既に一千名に近い

北支の石炭埋藏量は千七百億噸、假に日本が一年に一億噸づつ
消費しても千七百年間は優に送られる・寫眞は大同炭田の露頭

炭礦に働く少年礦夫

東亞共榮圏の期待する
北支の資源 二

石炭

支那の石炭が有名になつたのは、一八七〇年ドイツの地質學者リヒトホーヘンが山西の諸地方を踏査し、山西一省で一兆二千六百億トンの石炭が埋藏され、世界にあるいかなる有名炭田も山西省の炭田には匹敵することが出來まいと詠嘆するが如く讃辭を呈して世界の耳目を聳動せしめてからである

この報告は後になつて外國學者の種々な調査の結果、その過大評價であることを指摘され、修正されたのであるが當時にあつてはマルコ・ポーロ以來の「物語に聞く東洋の祕庫」を現實に裏書したものとして著しく列强の注意を喚起し、列國の支那への進出を拍車づけるモメントになつたと云はれてゐる

貨車の積込み

北支・蒙疆の石炭埋藏量は、概算一千七百億トンと稱され、これを日本內地の埋藏量百六十億トンに較べると約十倍强に當る。また山西一省をもつてしても一千六百億トン、イギリスの一千四百億トンを超過すると云ふ豐富さであり、省內到る處その埋藏が見られる石炭の多寡は一國の富と力のバロメーターであり、石炭のない國はその發展を抑制されると云はれてゐる今日、無盡藏に横たはる北支・蒙疆の石炭の開發は產業日本の目下の急務であると云はなくてはならない。その先決問題はこの石炭を日本內地に送るための輸送路、つまり鐵道、港灣、船舶等の運輸機構を一貫的に整備擴充することである。これが遂行されねば無盡の寶庫は永遠に開かれぬのである。北支・蒙疆の水陸交通の綜合運營に當つてゐる華北交通會社はこの見地から、資材逼塞の折柄にも關らず萬難を排して新鐵道路線の建設を急いでゐる

ところで、どんな炭田がその開發の對象になつてゐるかと云ふと山西省の大同炭（四百億トン）を始めとして河北省の開灤炭（七億トン）井陘炭（二億二千萬トン）山西省の平盂潞澤（五百億トン）山東省の魯山炭（七億三千萬トン）等が注目されてゐる

鐵鑛石の鎔解に不可缺なコークスの製造

東亞共榮圈の期待する

北支の資源　三

鐵

鐵は石炭と共に日本にとつてまことに重要な資源でありその鐵鑛資源を獲得することは非常時日本における目下の急務であらう。西洋の諺に「鐵を造る國は富み鐵を使ふ國は強し」と云ふ言葉がある。前の歐洲大戰當時、ドイツオーストリアの鋼の一箇年生産額が二千二百萬トン、聯合國が二千二百萬トン、丁度、鋼の生産量がバランスして居たから、なかなか勝負がつかなかつたと解說する人もある

しかして日本の製鐵界を見るにその消化する鐵鑛石の大部分は之を輸入に仰いでゐる現狀である。我國の生産擴充計畫によれば、五、六年後には莫大な消費量を示すものと推量される

ところでこの鐵鑛石を容易に且つ速かに安價に供給する地區を求めると、先づ內地、朝鮮、滿洲、支那、南洋の順となるが、前二者は埋藏量の僅少、鑛石所在地の邊鄙、又は貧鑛等の諸理由で增産增掘の難點が橫たはつてゐる外に、鮮滿の如くその地に鎔鑛爐を設備してゐるところからは內地への供給を期待することは出來ない。此點から日本の要求を滿して吳れるのは何と謂つ

原鑛石の採掘

ても支那と南洋だと云ふことになる。

北支の鐵の埋藏量は石炭よりは遙かに少ない、しかし大規模な製鐵工業を起すに充分であると云はれてゐる。正確な統計ではないが一億四千八百萬トンで、尙山西省の各地に埋藏量を有してゐると稱されてゐる

支那における鐵鑛の利用は極めて古い歷史を有し、鐵器の製作も周時代に始まり、鐵に稅を課することも春秋、戰國時代、即ち鐵器時代の開始と共に積極的に行はれ、歷代王朝の有力な財源となつてゐた。漢の時代には、支那の中央のみでなく、邊境地方にも鎔鑛爐があり多量の鐵を產してゐるのである

又支那の鐵が中央アジアを通つてイタリアのローマに入り、當時各國から入つて來る鐵の中で支那の鐵が最良のものであつたと云はれてゐる。このやうに歐洲にまで名を轟かせた支那の製鐵が、無能で貪慾な封建支那の社會經濟の缺陷の故に、漢時代の鎔鑛爐の跡さへないほど衰微したことは極めて殘念である

現在北支の鐵鑛中で第一に注目されるものに蒙疆地區の龍烟鐵鑛がある。埋藏量は一億トンと稱される大鑛山で北支埋藏量の七〇%を占め、平均鐵分は五六%質量共に非常に優秀なものである。龍烟の外に主なる鐵鑛として河北省の灤縣、山東省の金嶺鎭がある

海州鹽田にて

東亞共榮圏の期待する北支の資源 四

鹽

わが國の鹽の需要は、化學工業の躍進につれて近年急テンポに増加し、工業鹽の不足は益〻深刻化しつつある。昭和五年において既に百萬トンを突破した工業鹽は、昭和十二年においては實に二百三十萬トンといふ驚異的數字を示してゐる。しかるに、わが國において生産されるものの殆ど全部は食料鹽で工業鹽には適せず、その絶對部分を海外の供給に俟たねばならぬ現狀にある。ところで、この工業鹽を外鹽に依存せず容易に且つ速かに安價に供給する地區を求めると先づ、臺灣、關東州滿洲及び北支の順となるが、臺灣の鹽は土地や氣候の關係から増産の點に難點があり、關東州や滿洲ではその地に化學工業が發達しつつあるので、この點から日本の要求を滿たして具れるのは何といつても支那だと云ふことになる。支那の製鹽は漢民族の南征によつて苗族が西走し、漢民族が揚子江、黄河の流域たる天惠の肥沃地を征服した時に始まる。周代には四川に井鹽、山西に池鹽、陝西に岩鹽が發見され盛んに利用された。特に四川の井鹽は飴鹽と稱し最も珍重され王侯の膳のみに用

鹽水を汲み込む風車

ひ、一般庶民の採取を禁じた

その後支那の鹽業はだんだん發達し、齊の時代青州（今の山東省）に產する無盡藏の鹽に着目した齊の參謀管仲はその鹽田を擴張し、官營となし人民の私營を禁じ專賣制を取つた。これが今の山東鹽の濫觴である。山東鹽の產額は事變前にあつても年四十萬トンに上つてゐた

この山東鹽と共に支那の二大鹽地と稱されてゐる長蘆は宋の時代、小さい鹽田に過ぎなかつたのであるが、金朝を經て元の時代になると、ここに鹽業が發達した。元はこの地が天惠の製鹽地で品質も佳良であるのに注目し、主力をここに注ぎ模範鹽田を作つて盛んに製鹽を行つたのである。その產額は巨大に上り且つその利潤は莫大なものであつた。長蘆といふ名はこの地方が蘆の產地であるからで、昔は二十場近くも黃河に面し、蜿蜒とその鹽田が續いてゐたのであるが、國民政府によつて制限され、蘆臺と豐財の二場だけになつた。しかしそれでも一箇年の生產額は事變前においても四十五萬トンを下つてゐない

また最近我軍によつて確保された海州といふ新通商港はもと東海といはれたところで、青島と上海の中間にあり商業都市として、將來素晴らしい發展が期待されてゐるが、この附近一帶は山東鹽、長蘆鹽とともに支那における鹽の產地として重要視されてゐる

華北交通中央鐵路農場の棉の採取

東亞共榮圏の期待する 北支の資源 五

棉

世はあげてスフ時代、今ごろ「純綿」だなどと威張るのは國策を辨へぬ不埒者である。だが、わが國の綿糸紡績は本邦重要工業の首位にあるもので、一箇年間の綿糸布製造高は已に十數億圓に上り、最近まで紡織界に覇を唱へてゐた英國を凌いで世界第一位にある。しかし遺憾なことにはその原料たる棉花のすべてが海外からの輸入によるもので、我國にはその產出が全然ない。更に中國、滿洲について見ても人口五億の八〇％以上が農民で衣服の全てが綿製品である

このやうに棉花に關する問題は日本及び中國の國民生活から考へても、國際貿易上から見ても極めて重要であり、棉花資源の獲得は一刻もゆるがせにできない。朝鮮、滿洲、北支を含めた日

一年一度の棉の收穫を肩に農民は一斬一軒最も高く買ひとる問屋をまはり歩く

本の勢力圏内における自給對策が懸命に研究されてゐる所以である。しかし朝鮮と滿洲には棉花增産二十箇年計畫といふ遠大な理想を揭げられてゐるが豫定通りの生産が實現しても、これによつて鮮滿から供給し得る棉花はわが國需要量の一割見當に過ぎぬといふ、いきほひ日本が期待し得る處は、北支を措いて他にはないといふことになる

支那の棉花の起源はまことに古く、支那へ佛教が渡來した頃、印度からもたらされたものといはれてゐる。棉花はすこぶる耐旱性に富み、また北支にあるアルカリ土壤地に適してゐるので以來急激に發展した

現在北支三省（山西、河北、山東）における棉花の作付面積は全支棉花作付面積の三〇・二%、その生産額は全支生産額の三六%で、三百五十萬ピクル（一ピクルは約百斤）を産し、支那全省では九百三十萬ピクル、米國、印度についで世界第三位になつてゐる

ただ北支の棉花はまだ粗毛品が大部分を占めてゐることと食料作物との均衡の問題、單位面積からの增收策など研究改良さるべき問題が多く、華北交通の通州中央鐵路農場が中心となつて鋭意その科學的研究を行つてゐる。北支棉花の主産地は黄河の流域で華北交通會社經營の南運河や、子牙河などを利用して、幾日もかかつて鐵道沿線へ運ばれて來るのである

華北の土俗人形

Some Provincial Dolls of North China

日本の強さに驚いた西洋人が日本の子供はどんな玩具を持つてゐるかと注目し出したのはあまり古いことではありません。人形を使節にして國際親善を計ることは今迄にも西洋人がよく實行しました。私達は今、東亜共榮圏確立のため戰つてをりますが、これから協力して行かねばならぬ中國の子供達はどんな玩具を持つてゐるかを知る事が大切ではないかと思ふのです

此處に掲げた玩具は華北の各地のものを少し選んでみたのですが、なかなか面白いではありませんか

材料は大部分泥（粘土）か紙で、塗料は泥繪具の強い原色、それも赤、黄、綠、青などほんの僅かな色數をとても巧くしかも大膽に使ひこなしてをります（記事頁「華北の土俗人形」參照）

泥鷄兒・高さ二寸五分

濟南の泥娃々・高さ七寸

北京の抽線面型・紙張子 高さ七寸

泰安の撥不倒・紙張子

泰安の撥不倒・紙張子

面型・高さ一寸五分

面型・高さ一寸五分

天津の泥娃々・高さ三寸五分

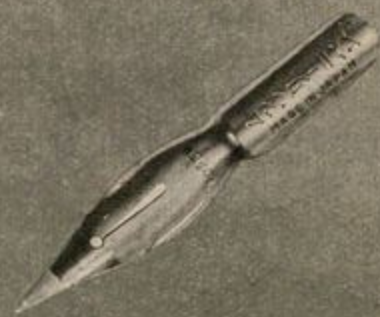
開封の泥娃々・高さ三寸

太原の泥兎兒・三寸大

北京の布娃々・高さ七寸

無敵！國産第一位

ムッソリーニペン

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！

新生國策イリヂュウム
白金ペン付

クラウン万年筆

書きよく
體裁優美
構造堅牢

流線型

―北京・北海公園―

大阪・東京・小倉 株式會社 澤井商店

北京のインク街と新聞寺

小山内匠

北京のインク街といへば今も昔も宣武門外である。事變前には四十數種の新聞社、雜誌社が存在し抗日陣の尖端を走つてゐたが、事變と共に逃亡或は自滅して、それらは一掃されてしまつた。然し乍ら宣武門外のインク街としての地盤といふものは、其の大きな時代の波にも動かず、再び新しい秩序の脚光を浴びた新聞の登場によつて、インク街獨特の活氣を取戻した。即ち實報、新北京報、晨報、時言報、戯劇報等々が宣武門大街に軒を並べ、其の他三日刊週刊等の雜誌社も大體此の附近に新社屋を設け、北支の全域に呼びかけるに至つた。それは丁度東京丸の内界隈がインク街を形成してゐるのと同樣で、宣武門外の言論的勢力は仲々どうして隱然たるものがあるのである。

ではどうしてこんな外城の一角にインク街が現出したのであらうか？之こそは遠く清朝の文化政策に負ふ處が少くないのである。誰しも承知してゐるやうに清朝の康熙、雍正、乾隆の三帝は學問を深く愛して、學事を奬勵したから當時學問が興隆して多くの大學者を輩出した。殊に當時編纂された四庫全書の如きは三百餘名の學者を動員して十年の歳月を費し、肉筆を以て淨書したもの、實に二百三十萬頁に達した。此の外著名なる大編纂が續々として行はれたが、それら天下の大學者達の住宅は何れも宣南一帶に限られ、客籍學者（地方出身にして北京に客遊する人）らも皆、此の宣南に居住したため、學者住宅區の觀を呈した。其の結果北京の書店、筆墨、文房具店また此處に集ひ、彼の有名な琉璃廠にそれらの大小商店が櫛比し、今日に至るも尚清朝ありし時代の殷賑を留めてゐるのである。つまり和平門外より宣武門外に至る所謂宣南一帶は、昔を今に變らぬ北京の文化區なのである。此の地に新文化を生み出すインク街が發展を遂げたことは極めて當然な話であつて、寄とするには當らぬのである。

＊

さて此のインク街の中心地、南柳巷といふ小路に「古刹護國永興寺」なる一寺廟がある。永興寺は明代の創建にかかるといふから少くも五百年は經過してゐる。此の古寺が、北京城下百五十萬の中國人に日々ニュースを送り出してゐる世に隱れたる新聞寺なのである。といふのは永興寺が北京に於ける新聞配給の總本山であるからだ。之には北京のみに獨特な發達を遂げた新聞配給機構に就て簡單に說明を加へなければならない。

北京の各新聞社は直配乃至は日本式な販賣店といふものを持たず、報房と派報社といふものに百部に對し一割の利益配分を以て卸をする、すると報房及び派報社は、それを更に報夫（配達夫）に卸す。即ち、永興寺が新聞配給の總本山であるといふのは、此の寺院内に五つの報房と五つの派報社が在つて毎朝、七時から八時の間に、北京の

內容

漢字紙の報夫約五百名に近い者が殺到し、必要部數を求めて各自の定められた路線に配達乃至は立賣りを開始するからである。

現在報房には聚興、公興、永豐、義興、大德堂があつて、前二者は創業百年を越えるといはれ、其の他も三十年程度の歷史を持つてゐる。そして派報社には林紀五、趙書銘、唐貫一、王嗣堯、李國華がある。此の報房と派報社との區別は報房は派報社より創業が古く取扱部數も多い、又報房が各社の新聞を扱ふに對し、派報社は一社の新聞しか取扱はない。そして報房には夫々公興とか永豐とかの屋號があるに反し派報社にはそれがない。

では之等の報房、派報社は永興寺と一體如何なる關係があつて何日ごろから今日のやうな新聞寺を現出するに至つたのであらうか。筆者は之に就て北京通といはれる老北京人は固り、北京の街巷歷史書として著名な『京師坊巷志』『舊都文物略』等に就て調査したが、此の故實を明かにする何等の手掛りを得なかつたのみならず、永興寺が新聞配給の總本山であることすら認めてなかつた。之よりして北京の新聞配給機構が永興寺に集約されて發達した實狀は、全く習慣的に何日となく自然的に形成されたものと判斷されるのである。然し永興寺が今日のやうに新聞寺化すに至るまでには幾段階があつたものと想像される。それは北京に於て新聞形態を整へたものが發行されたのは今から四十五年前であつて、それ以前に新聞類似のものとしては、單に清朝の『上諭宮門鈔』があつたに過ぎない。創業百年に及ぶといふ報房では最初此の上諭を本業として取扱ひ、それに瓦版、木版本等、巷說を興味的に繪入りに書いたものを賣つたといつてゐる。從つて初期に於ける永興寺の報房は、販賣路線が集約的であつたとしても、それは極めて小範圍な、しかも不規則なものであつたであらう。卽ち永興寺は今から百年以前までは每月開廟——緣日を開いてゐたといふから、當時附近の學者による著述が多く此の緣日で販賣され、やがて其の販賣人達が顧客にサービス的に定期的發行物を配達したことが次第に規則的となり、更に進んで寺が信仰的に衰微するに反比例して上諭鈔や瓦版の販賣が興隆に向ひ、遂に佛殿の閉鎖、業者の寺院内居据りといふことになつたのではないか——恐らく之が初期より中期への過程であつたであらう。

*

僅かに一枚でしかなかつた清朝の『上諭宮門鈔』が激しい時代變化の應接に追はれて、諭旨、命令事項が增加し一枚では間に合はなくなると『諭摺彙存』となり『閣鈔彙編』となつて次第に新聞化の傾向を辿り、遂に今からざつと四十五年前に官報式を脫して社會的事件をも取入れた『黄皮京報』の出現となつた。此の支那で最初の新聞は創業當時、永興寺内の一室で印刷された。けだし之は永興寺が新聞寺として新聞の販賣とは離れられぬ關係を其の頃既に有してゐたと見られる證左であり、本格的な新聞寺化の第一步といはなければならぬ。以來各種新聞が文化人としての學者の多く居住した宣南一帶、殊に永興寺を中心地として開設されたので、永興寺の發展に益〻拍車をかけ遂に今日の盛大をもたらすに至つた。

此の永興寺の報房の最盛期は民國十七、八年ごろで當時は每日三、四十萬にも及ぶ取扱部數があつたといはれる。それは事變前後期を凋落の谷としてゐたが、最近又々好調に入り漸次盛り返して二十五、六萬に達してゐる。從つて報夫も景氣がよく寺内には報夫四百三十八名を擁する新民會報夫分會なる**報夫團體の事務所があり、報夫紛糾調**停委員會もある。更に報夫訓練班と報夫子弟小學校が粗末ながら設けられてゐる。

さてここで一應報夫なるものに就て述べる必要があらう。一口に報夫とはいふが北京の報夫には送報的と賣報的の二種がある。送報的は街頭で新聞名を口にする必要がなく一定の讀者を有し配達をすれば足りる。賣報的の方は固定讀者がなく一部一部と賣つて歩かなければならぬ。然し賣報的とて固定讀者が一戸一戸と出來て行くからやがて送報的になり得る。此の賣報的は現在約五十名で全報夫數の二割にも達して居ない。處で注目すべきは之等の報夫は大部分が山東出身者によつて占められてゐることである。それは北京の水夫や糞夫が山東出身者の獨占事業になつてゐるのと同一で、ここにも我々は支那社會に於ける地方同鄕の結合同業の團結といふことをハツキリと見ることが出來るのである。それにしても水閥に糞閥それに報閥といふものが悉く一つの路線を有するものであり、共にそれが山東出身者であるといふことは奇妙な話である。

之に就ては何かの根據がなければならないと思ふが、報夫達は之を簡單に**「我々山東出身者は地方訛が酷く、我**

つて北京人と口數をきかずに出來る商賣、資本が少くて簡單に飛び込める社會を選んだに過ぎぬ」といつてゐる。成程それも一理であるが、報閥の場合は最古の報房にして『黄皮京報』の初版及び新思想のトップを切つた康有爲の『中外日報』等を一手販賣した聚興報房の主人公即ち組織的な新聞販賣の草分けをした王紹棠といふ者が山東出身者であつたといふことに起因すること多大である。

それは兎に角報夫の販賣路線は何日となく定つてお互ひに人様の繩張りは犯さないといふ不文律が生じた。それは糞夫に糞道、水夫に水道が守られてゐるのと變らない。賣報的は一見足任せに町中を歩いてゐるやうだがあれで路線は毎日定められたコースに従つてゐるのであつて、よし他の路線で讀者の注文があつたにせよ斷るか若くは該路線の報夫に無條件に取次ぐのが報夫社會の仁義である。若し他人の路線にまで勢力を侵蝕する者があれば紛糾調停委員會にかけて不心得者と斷定されれば報夫社會から追放する。彼らの社會秩序は階級程度こそ低いが此の様に嚴である。

此の報夫達はどの位の部數を扱つてゐるかといふと多い者で四百部、少い者で百部程度である。然し報夫は事變後新聞單價が高騰したので利率もよく昔のやうに多數に販賣せずとも生活費が得られるやうになつたので勞働が樂になつたといつてゐる。報房、派報社も昨今では民國十七、八年頃の最盛期に近い收入であるといふから、新聞界の事變後に於ける躍進振りがここに遺憾なく窺へてゐる。

＊

新聞寺として百年の傳統勢力を誇る中國新聞の配給機構に一つの變化を投げかけたものに日本人の恐しい増加に伴ふ邦字紙の大陸進出がある。同時に邦字紙式販賣制度を採用し、永興寺の報房、派報社によらざる新聞が現出したことである。之は云ふまでもなく永興寺を中心に形成されてゐる新聞配給機構――即ち一定の路線とか報夫社會の秩序にはお構ひなく入り込む新勢力であり、此の新舊二勢力は果然猛烈な對立となつたのである。勿論、邦字紙の場合は讀者社會を別箇にしてゐるから、さして問題はなかつたが漢字紙の一流新聞が此の路線を縱横に犯したことは、舊體制下にあつた報夫達の大問題であり、少なからざる脅威でもあつた。そして、其の漢字紙は日本式な夕刊制を實施して夕刊配達を開始したから、支那に於ては正に劃期的であり永興寺の報夫たちを先づ啞然たらしめたのである。然るに民衆の新聞に對する長い時日に出來た愛着と習慣は、何日の間にか此の夕刊を廢止させ、配賣店をも次第に永興寺に歩み寄らせる結果を招來した。即ち永興寺の勢力を無視して北京の新聞販賣の成績と配給の能率とが上らないことを實證したのである。其の結果昨今では永興寺を無視しようとした新聞社さへ派報社を指定し永興寺の一隅に仲間入りをしてゐる。のみならず邦字紙たる東京、大阪の新聞は固り日本各地の地方紙さへ、ここから邦人讀者に配布されてゐるものが漸次増加してゐる有様である。之は要するに永興寺の販賣機構が自然發達を遂げたものだけに支那社會へ或は北京の街の構成に對して素晴しい良さを何處かに發揮してゐるといふことを認めざるを得ないのである。此の外南京、上海の漢字紙は勿論、各種の英字紙もあるといつた具合で、まことに朝の永興寺こそは新聞の一大卸賣市場であり「新聞のデパート」であるとも云へるのである。之を敢て筆者が獨斷ながら新聞寺と呼んでここに紹介するのも、あながち誇張とのみ云へぬものがあるだらう。（筆者は支那研究家）

袁世凱の性格

平田小六

現代支那の黎明期に登場した人物のうち、現世的には最も巨大で華やかであつたかのやうでありながら、後世への影響力に於ては殆ど皆無に近いといつた例は、袁世凱ほど甚だしいものも尠い。李鴻章には遠く及ばないとしても、あの悲劇的な康有爲でさへも、現代支那に遺してゐる影響力は遙に大きなものがあつた。

*

今日、我々が袁世凱の政治的な性格を論ずることはまことに容易である。しかし、彼と同時代の誰がよく當時その本質を見破ることが出來たであらうか？

「政治の理念」といふ言葉がある。しかし、政治は本來「理念」からは最も遠いところで營まれるものである。あまりにも現實的であり、現世をその舞臺とする政治が「理念」をもつて裝はうとするところに政治の政治性があるともいへるのであらう。

かうして政治はあくまでも、現世的であり、地上的である時に、その力を發揮することは出來るが、その眞の價値の問はれるのは後世に屬する。

あれ程巨大に見えた袁世凱は、かへつてあの見窄らしい康有爲に及ばなかつたのであらうか？

*

政治の秘密は案外かういふところに窺はれるやうに思はれるのだ。地上に於ける我々の實生活は、まさしく夢ではなくて現實なのであるが、この意味の實生活が直ちに我々の全存在だとは限らない。

多くの場合、實生活は個々の人々にとつて、その生活の一部分に過ぎないともいへるのである。人々は政治が人間を支配してゐると考へてゐる。しかし、より多くの人はその實生活に於て、それとは關係のないところに生きて居り、そこから逆に人々が政治を支配してゐるといへるであらう。

政治の持つ力の強大さも、そのつまらなさも、そこにあると云へるのである。

*

黎明期支那に登場し、國際的な混沌のさ中に處して、袁世凱のやうに圓轉滑脱な政治的手腕を發揮し、且つその生涯を通じて現世的な成功を遂げた政治家は珍らしいであらう。彼が偉大であるとか、山師であつたとか云ふ議論は愚にもつかない。彼は一時代を生きたといふ意味で全き政治家であつた。政治といふものは、恐らくそれ以上のものではないであらう。

*

袁世凱の生涯は、近代支那の政治的混沌の象徴であると同時に、多かれ少なかれ政治の本來的な性格を表象するものではないかといふ考へが長い間私をとらへてゐた。

袁世凱の政治的活躍舞臺や、その生活を知るばかりでなく、彼を血肉的に把へたいといふのが、私の宿願であつた。

*

袁世凱の近世史への登場は、西暦一八八二年（明治十五年）、閔妃の亂に際し、呉長慶の幕僚として活躍した時から、一九一六年のあの喜劇的な即位式までの三十年とすれば、直接彼を知る人は、幾らも現存してゐるわけである。

坂西中將は、日本人の中では最も親密な關係の中にゐた人であらう。北京に永住されてゐる金田一良三氏の話に依ると袁のブレエーンの一人であつた曾彝進氏も矍鑠として北京に住んでゐるといふことであるが、怠けものの私はまださういふ人達から直接話を聞く機會をつくれないでゐる。

その外二三の人々から袁世凱の外貌や印象を聞いたが、既に歴史上の人物となつた彼を把へるのには、他人の區區たる印象などはあまり役にたたないのである。回顧的に彼を語る人々と、史上の人物として我々が資料の上から眺めた彼との間にはあまりに大きな相違があるといふのが最近までに私の得た經驗であつた。

世界的には全く我々の時代に屬してゐる彼が、印象的には古い時代に埋沒してしまつたといふ感じである。それほど現代支那の變貌が甚だしかつたのであつて、彼の沒落が古い支那から新らしい支那への明確な斷層を劃したものといへるであらう。

*

袁世凱に就ての資料も、以前は夥し

い數に上るものがあつたらうが、今日まで私が北京で散見した袁世凱傳は四五種であつた。これらの多くは謂ゆる支那浪人の著書で、いろいろな方面から渡りをつけて提燈もちをしてゐるに過ぎないが、そのうち、關矢越山氏の『怪傑袁世凱』（大正二年實業之日本社發行）は、史觀が透徹して居り、嚴正な批判的態度で史實を擧げてゐる點他の追隨をゆるさぬものであるやうに思つた。大正二年と云へば、袁世凱が正式に大總統に選擧された年であるが著者は卷末を「彼が果して世界的英雄なるか否かは、向後の彼が手腕に於て決せられん」と結んでゐる。これは、現實の人物を史上の批判に委ねる周到な用意であることは袁世凱の場合、典型的にそれを示してゐるやうに思はれる。

＊

むしろ彼を最も具體的に把へる方法は、その活躍舞臺を外郭から眺めることに如かないやうである。

清末政治の混沌さ、その怪奇な相貌は、袁の前半生の活躍舞臺である近代朝鮮の妖怪じみた迷濛と葛藤を併せて現代の複雜怪奇など、そこ退けといつた怪奇さであつた。

最近では政治はすつかり複雜怪奇なものと相場が決つたやうであるが、恐らく當時はかかる情勢に處した袁世凱にとつても、やはり複雜怪奇なものに映つたかどうか？むしろ彼にあつては、自ら操る糸先が、彼の設計通り動いただけで、彼にとつては到極簡單なものであつたかも知れない。

＊

晩年に於ける袁世凱の悲劇は、戊戌政變の際の裏切りに遠く胚胎するとは巷間の說である。彼への非難もまた專ら、そこに注がれるのが普通である。しかし、この點に關しても議論が區々で、遽に決することは出來ないのである。

上記、關矢越山氏の本では、當時行はれた各方面の巷說をそのまま傳へ、著者が妄に即斷することを、避けてゐる。恐らく彼のブランド（ベエクハウスとの共著、支那名「慈禧外紀」）の記載にあるやうに、謂ゆる「裏切り」は西太后に屬する舊勢力と光緒帝一派の革新派との勢力關係に精通した袁の識見であつて、そこに、彼の彼たる所以があつたと考へる方が至當であらう。政治の道義詮索など、つまらないのである。

＊

近代朝鮮史には、よるべきものが甚だ尠いが、袁世凱勉强の途上、菊池謙讓氏の「近代朝鮮史」（上下、京城鷄鳴社版）を見出したことは、私の袁世凱形成を決定的にして貝れたものであつた。（筆者は作家）

袁世凱

利根義夫畫

華北の森林地帶

杉本壽

華北に森林地帶はあるかと問はるれば、やつぱりあると答へざるを得ないだらう。それならば、どんな植生生態をとつてゐるのだらうか、原始林か人工林かなどが興味深い對象として登場して來る。

私は自論として、中支南支地區の森林地帶を概括して施業林業地區とし、華北西北林業地區をして建設林業行政地域としてゐる。

中國の森林地區を詳細に述論してゐるのは Norman Shaw のアトラスであらう。彼は木材鑑査の立場から述べてゐる最も要約された參考書である。

中國一萬年の農業文化の發展は、發達途上の過渡期に於て、中國林業と森林の廢滅を無意識の裡に加碍し續けてきた。これ等の問題はまた Geopolitik な問題となるので、次の機會に讓らねばならぬだらう。

以上の前言をして、各省地域毎に概般を述べてみると次の如くである。

一、蒙疆地區

舊綏遠察哈爾山西北方の一部の現政治區域に於ては、包頭の龍泉寺、厚和の美しい街路樹や小五臺山の森林。記林街道の王昭君の青塚に植樹する記の碑、五當召の Wacholder（ビャクシン）屬の叢林、北方に進めば滿洲國境園場――多倫間の白樺の自然林、東浩濟特王府北方の楡、柳（H, 4―5m. 徑15―6km.）の野生林、德化北方の針葉樹林、土木魯臺――四子王府間の濶葉樹林、百靈廟北方の濶葉樹林等、偉大なる中國農業文化の虐殺圈内を外された、原始林と云ふには餘りに哀れな疎林が殘存してゐる。

學者の一說によると、蒙古民族は實にダライ湖附近に發達して、三河――濕泉地方の森林地帶から、漸次往年の光榮ある大民族を象形するに至つたといふ。森林と蒙古との民族生活が破れて、この民族は森林を捨てていつた。歷史科學的に見る民族と森林の物語りは長い。考古學的見地からもこの間の相關關係を究明してゐるのである。

二、河北省地區

本地區は、滿洲國との境界一帶、及び山西省境を劃する大行山脈が點在森林の所在地である。

東陵。昌平縣の明の十三陵、湯山溫泉療養所、易縣梁格莊の西陵寺、老松の古園幾萬坪、更に古書をひもといて松林の跡を訪へば、今や國家亂れて其の姿なく、華人の遊子ならなくとも哭かざるを得ない。

大龍門、淶源、滿城、阜平、唐縣、曲陽の西方大行山頂との高地帶は、有名な果樹地帶を構成するが、立派でない疎林の森林地帶を存し、ためにこの附近の易水、唐河の上流河水は日本の川と同じで、腹一杯すすり、幾十日の裸體の洗濯をしたことを想ひ出としてゐる。

又、保定農學院の林學系や北京大學の演習林があつた。京漢――津浦兩路の中間に數百町の濶葉樹森林を有するがこれは大黃河の沿道によくある一種の部落林で、保護撫育された殘存林の一種である。

北戴河海岸の松林、秦皇島附近の見事な滿洲黑松の大樹林などあるが、これは特殊地區に入れなければならぬであらう。

中國の林學者は、果樹を林業の中に入れてゐるが、若しさうだとすると、南口附近の柿、舊冀東政府地域は河北の果樹森林帶でなければならない。

三、山東省地方

芝罘、山東半島の果樹林や青島――芝罘間に針濶葉の疎林がある。又、植林してまもない稚樹帶を見る。

山東の脊骨をなす山脈には所々にまだ貧弱な人工林が存在する。濟南のコノテガシワの廟林の山や泰山の自然美を畫く針濶混淆林は見事であつた。

青島の入口に、青島と云ふ孤島がある。燈臺も勿論あるが、この小島にもせつせと造林をした、獨人のアルバイトには敬意を捧げるのである。この省で忘れてならないのは膠濟沿線に於ける一大造林事業で、山西の閻先生の林業政策と共に、對蹠性をなすもので長く記憶すべきことであらう。

青島の美は赤い煉瓦の印象と共にその森林美の添加的役割は絕大である。

南部山東の日照、莒縣諸城は海岸の方から行つてみたが、ひどい烟霧（ヘイズ）の日で森林調査の目的は達せられなかつたが、水靈山、又山、車牛山、坪島、泰山の諸島は見事な禿、皆代荒廢の裸島で只プロテスタントの白堊の禮拜堂の

みがボツネンと廢殘の孤村にまどろんでゐた。

四、山西省地區

閻先生の林業十箇年造林計畫の本場だけあつて、成果の如何は別として、努力十年の跡は否定出來ないものであつた。今、大同から同蒲線に沿つてあの見事な軍用公路を下つて來れば、その路傍にポプラ、ドロヤナギなどの苗圃林を瞥見し、寧武縣は森林鐵路による斫伐事業唯一の箇所であつた。又一面から云へば煉瓦を燒いた薪炭村の絶滅は今日見るある枯淡な雄絶な雁門の風容を象形したのかも知れない。併しあの山上に Hutweidegang の農耕形跡を殘すところからすればそのかみの森林の存在を疑ふものはないだらう。

山西の西側地區は割合未開で、岢嵐、靜樂や嵐縣、方山には最も人口の少い天然林を有し、そのため附近の河川は水があり、河原の石には千草や地衣類が密生して森林の良さをしみじみ感じさせるものがあつた。

連枝、中條の諸山脈も少し%を少くするが割合あちこちにあり、其の間を縫うて閻林政のコノテガシワ一本槍のあまり成績の良くない造林地が到る處で見られる。就中靈境靈山の如きは今に榮存してゐる。晉祠鎭の如き清き湧水と共に山（森林を含む）水の美の名勝地で其の附近には造林地も多い。

五臺山、潞安平野地區にも見られ、就中この山岳の峰條の山道は古來よりの舊道で徑數尺に達する樺や黒松の道標木は懷しい街道並木を偲ばせ、ある地方ではこれをくりぬいて日本の木地師の如き部落もある。この道は又五臺山遍路の數萬里を遠しとせざる信仰の道で、處々に天然林が點在してゐる。

松林（蘇北交通所有苗圃）

五、河南省地方

河南の森林地帶は、謂ゆる豫西豫南道地區で、洛陽南方洛水、伊水の水源地は、日本の山村より一層原始的な森林に覆はれてゐる。現在河南大學農學院のある嵩縣の樣な伏牛山脈を中心として河南の森林地帶を代表してゐる。

豫東地區の平地林は別論として、蘭封、碭山を出荷中心とする河南桐は生育大にして緊緻性を有し、柘城縣を中心として鹿邑、大康の諸縣及び黃河の北方地區に多く、耕地林の間に一箇の森林をなして大造林されてゐる。

豫北では清化鎭の大竹林があり、實に全縣下の三分の二が竹林で占められ栽培法も仲々進歩して、謂ゆる竹の柱に茅の屋根の家が多い。

六、蘇北地方

江蘇省の北部、銅山縣、豐縣、碭山蘭縣も含める蘇北專員公署の行政區域である。往年はここの農事試驗場は有名で、多くの試驗アルバイトと共に一般並に農業氣象學上のチーフ・ステーションであつた。

新安鎭附近の竹材は郯城附近か宿遷縣あたりから出るのであらうか。

東海林附近から山を迎へ連雲港建設公署區域に入り、墟溝に出ると、見事な海岸松が內地を想はせる程である。

連雲の町は小さな町で、連雲港ホテルを取り卷いて谷間に生ふる黒松林は今繁生の盛りである。

この背後、水源湖のある附近から雲臺山にかけて赤松林を主木とした自然原生林があり、山西の天然林とタイアツプして僅かに殘つてゐる。

（筆者は京都帝國大學農學部研究室員）

北京の寄席通ひ

村上知行

北京では寄席を稱して茶社とか雜耍館兒、その他いろいろな云ひ方をしてゐる。それといふのも一つのものに一つの名詞をあてがつただけでは氣のすまないといふ永い傳統の中國氣質からであらうが、私共のやうな外國人にとつては可成り厄介である。何故もつと簡單にしないのか！

私は嘗て北京官話を習ひながらしばしばかう呟いたものであるが、そのうちにだんだんああでもない、かうでもないと色々新顯な呼び名を考へてみる中國の人々の氣持に同感が持てるやうになつた。將來はいざ知らず、科學といふものを持たないで濟ますことの出來た中國の舊い文人たちにとつては文字を考へるのが、考へることの一切だつたとすら言へる。時にはそれが苦しいことでもあつたらう。

云亭山人はその名作『桃花扇』に序して「一字一句、心を抉つて嘔き成した」と云つてゐる位だから、あながちに生優しいばかりでもなからうが、しかし他の殺風景な努力にくらべると矢張り何かしらましなやうな氣がする。

米味噌の心配よりも、俳句を苦吟した方が、同じ苦勞でも苦勞の仕甲斐があるといふのは、いけない考へかも知れぬが、生れつき舊い人間である私には、日本にゐる時分からさう考へる傾きがあつたし、中國に來てからはそれが一層ひどくなつた。

此の事實をハツキリ私に自覺させたのが、實は他でもない、北京の寄席である。當時の北京には寄席の數も今よりずつと多かつたし、また特に青雲閣のやうな立派なのもあつて、私は暇のある限り足繁く通つたものである。

そこに現はれて藝を鬻いでゐた王鳳雲、王鳳友姉妹、榮劍塵、譚鳳元などといふ藝人が、今尚ほ思ひ出されるばかりでなく、そこに並んでゐた黑い漆塗のゆつたりした椅子までがなつかしい事變前の北京の追憶の一つである。

今日では何處に行つてもあんな椅子はないだらう。それは日本人の椅子と云ふ觀念からは大分遠い代物で、むしろ寢臺を小さくしたやうな——そしてその上に中國式の少し堅い座蒲團が敷いてあつたし、前には茶瓶や茶碗、乃至は菓子などのつまみ物を盛つた皿の置かれる小机みたいなものも用意されてゐて、そこに悠然座した氣持は歌舞伎座や寶塚の比ではない。

私はその椅子によりながら、何時の間にか私の持前である日本人式なせつかちな氣持を喪失して、成程これなら新しい名詞を考へても好いなと思ふやうになつた。

中國の人を向うにまはしてと云つたのでは少し烏滸がましいけれど兎に角ああか、かうかと考へてみたこともある。只自慢の出來るやうな工夫がなかつただけが殘り惜しいけれど、併し次から次へと變つた名を案出し且つそれを喜ぶといふ中國氣質の味ひとでも云つたものだけは解することが出來た。

青雲閣はその後つぶされた。今では他の極めて平凡な營業となりかはつてゐるが、私はときどきその前を俥で通つては、少し大袈裟な形容ではあるけれど、箕子の殷墟を過ぎての思ひ、乃至は彼のムラヴィエフが蔓草茫々たるアルバーヂンの跡に對したと同じやうな寂しい氣持があるのである。せめてあれだけは殘して置きたかつたといふ氣持がするのである。

一時さびれはてた北京の寄席も、その後ポツリポツリあちらこちらに新しく開かれるやうにはなつた。しかし、遂ひに青雲閣に及ぶものは出現しないし、またそれを希望するといふのも無理であらう。あの椅子は舊い過去の椅子である。新らしい時代はもつと輕便な椅子しか作らうとはしない。

今日現在、北京にある寄席で一番高

第一書房
戰時體制版 各78錢

東京麴町區三番町
振替東京六四二二三

山邊習學著
わが親鸞

初刷二萬部發賣

永遠の聖者親鸞は、同時にまた民衆にとつても親しき人である。本書は人間としての親鸞の全貌を描いて、その精神的内面を展開する!! まことに聖者とは白眼一世を睥睨するものでなくて、世を荷つて渡る人である。

好評!! 賣切れ近し

本書は彼の一生を史實に卽して述べるだけにとどまらず、彼の心の動きをも捉へて、事實と内部を融解させて説いたものである。今までの聖者の概念を新しくして人間親鸞の偉大さを明らかにする。

淺野晃著 西洋二千年史 近刊

文學博士 佐佐木信綱謹註 明治天皇御集謹解

杉浦重剛謹撰 選集 倫理御進講草案

法學博士 大川周明著 新訂 日本二千六百年史

文學博士 後藤末雄著 支那四千年史

級な、一番新らしい、一番清潔なのは近頃東安市場内に開かれた新中國茶社であらう。その建物は以前花屋であつたが、それが立ち行かなくなつて料理屋にかはり、その料理屋が閉店して寄席となつたもので、昨今の北京の景氣では、これまた何時まで續き得るか疑問であるけれど、目下のところ營業方法も可成改良され、どうかかうか收支償つてゐるらしい。

私はこの新中國茶社が出來てから、實に暫らくぶりで寄席といふものを覗くやうになつた。考へてみると五六年振りだとも云へる。勿論その間、他の寄席をほんの時たま覗いてみるくらゐなことはしたけれど、いつでも樂しむまでには至らなかつた。これなら當分樂しめると思つたのは新中國茶社を發見してからである。但し、その樂しみはあくまで舊い樂しみだ。世紀に遲れた樂しみだ。肩を怒らす人々からみるならば、この非常時に怪しからぬと云はれさうな樂しみだ。

だが私にはそれがなつかしいし、またカフエーを知らず、待合を知らぬ不粹な此の私のやうな男には許されても好い樂しみではないかと思つてゐる。

これが劉子驥を氣取つて桃花源にでも踏み入らうといふのなら、今の世にふさはしくない道樂として擯斥されもしようが、私の寄席通ひといふことはそれ程大それた不覺でもないだらう。

私は新中國茶社で、幾人かの昔なじみの藝人を發見した。特に嘗て『金瓶梅』や『杜十娘』を歌つてその仇つぽくしかも枯淡な藝により私を狂喜せしめた老藝人の榮劍塵が登場したことは私にとつてむしろ望外の歡びだつた。ただ女藝人にこれはといふもののゐないことだけは、昔の北京の藝界の艶彩を知る私であるだけに、非常に物足りなかつた。ほんの二三人だけそれも申し譯みたいに出るだけで花貌なく、雪膚なく、藝そのものにもこれといふ取柄がない。それにつけても私の眼簾に尙ほ印象の殘つてゐる幾人かの彼女達はどこに行つたのであらう？　どうなつたのであらう？　私は不圖、かういふ他愛もないことを考へてみられるのも矢張り寄席の一德ではなからうかと思つたのであるが、さうした折柄一人の貧弱な少女が舞臺に現はれた。これでも藝人かと怪しまれる位であつたが太鼓を叩きながら歌唱しだしたその聲は萬更聞かれぬでもない。私は何だか拾ひものでもしたやうな氣がして、一體何をやるのかと耳を澄ましてみたら『閻江州』と云ふ藝題の一齣であつた。

これは例の『水滸傳』の第三十八回に材をとつた北京の太鼓書の中でも重い方の語り物で、梁山泊の英雄の一人である宋江が江州（今の江西九江あたりであらう）に流謫されたところを演唱する。そして、その曲のはじめの方には大意次のやうな詞がある。

烏龍院にて閻氏をば
殺せし咎のつぐなひに
流罪となりて江州へ
宋江は今、送られぬ
護送の役人二人あり
則ち李萬、張千二
好漢宋江をまもりつつ
晝は刑具をかけたれど
夜はほどきて共にいぬ
日數かさねていつしかに
見よ！　江州城は前にあり。

中國では昔から充軍と云ふことが行はれてゐた。遠隔のさびしくもまた險しい地をまもる兵は、おほむね罪人であり、つまり都で罪を犯したものが、送られて兵としての苦役を强ひられるのであるが、これを充軍といふ。日本語にすれば流罪であり、島流しであるが、私は少女の口から漏れる宋江充軍の故事を聞いて、急に深い感慨を催したのである。

流罪！　世にこれ程悲しい響きを持つた言葉がまたとあらうか？　而も人の世は此の言葉の響きに無感覺ででもあるかのやうに昔から洋の東西を問はず、遠慮會釋なく人を流罪にしてゐる。日本には八丈島があり、鬼界ケ島がある。中國には、近い清朝の時代にすら、黑龍江省があり、ロシアにシベリヤがあつた。世界一の紳士國のやうな面構へをしてゐるイギリスですら、つい先達てまで濠洲にちやんと Botany Bay といふ暗恨の地域を持つてゐたではないか！　しかもこれらの土地で朽ちたる鬼が、果して惡鬼ばかりであつたらうか？　私はちやんと近松巢林子が俊寬の口を借りて「鬼界ケ島に鬼はなく、鬼は都にあるものを……」と云はせてゐることを記憶してゐる。

舞臺の上の少女は、どこまでも『水滸傳』にふさはしい、勇ましい、血の氣の溢れた聲をふりたてて語り運んだのであるが、私の氣持は逆に沈んで行つた。人の世の歷史が「流罪」といふ暗いかげの中からホッカリと覗いてみえるやうな氣がする。

寄席通ひが樂しみであると云つた私も此處に至つてさうとばかり言つてゐられないことを悟つた。考へてみると北京の寄席は北京生活十數年の私にいろいろな事を教へてゐたのであつた。

カットは泰安の泥娃々

華北の土俗人形

（グラフ面寫眞參照）

中島　荒登

日本は世界の玩具國――徳川封建時代からの謂ゆる郷土玩具を指す――と謂はれますが、西洋人が日本民族の强さに驚いて、兒童玩具に注目し出したのは、あまり古いことではありません（大正末期）。けれどもそれに刺戟されて明治以來、同好の人によつて行はれた日本の玩具研究は、飛躍的發展を遂げ、今では文獻資料もおほかた整備してをります。同好者も多いのです。

それと較べて、中國の斯界を見たら中國人自身による研究は皆無に近い。この事は周作人先生も嘆いてをられた由、中國土俗學の手はまだここ迄及ばなかつたものと思ひます。

滿洲に居る時、私等繪仲間は滿洲の郷土玩具を蒐めました。玩具研究と繪の仕事を結びつけて、滿洲の郷土色を生かす目的なので、別に深い學問的精神はなかつたのです。

又、滿洲の玩具を究明するには、本元の中國を調べなければならぬ。正直なところ、それもよく行屆かなかつたし、まだ學問として成立つたものではなく、趣味的考現の範圍にとどまつたのであります。それでもいろいろの困難が伴ふことは申す迄もありません。

第一、參考文獻は殆ど無く。第二、地域が廣過ぎて、而も言葉の不自由があります。第三、同好の人が少いこと政治的經濟的に後援の機關を持たぬこと等。隨分面倒な事ですから、本當は將來何か一つの機關を設けて研究するのでなければ、此の厖大な處女地は拓かれないと信じます。

玩具の効用

然らば何故玩具の研究をするのか？

玩具を持たぬ民族は滅びてゐる――とは、武井武雄氏の言葉ですが、これは一國の政治經濟文化を包含する大問題であります。一歩退いて、玩具の效用だけ取立ててみても研究の必要は充分あるのです。

玩具の第一效用は、勿論敎育上の價値にあるけれども、一般的に見て玩具の第二效用を考へますと

(イ)玩具を通してその國民の風俗習慣趣味好尙を最も直截具體的に知ることが出來る。

(ロ)從つて國際親善の使節として國民外交の役割を果す。

(ハ)農家の副業として、又みやげものとして、最近は又國際貿易上の經濟的價値。

(ニ)室内裝飾としての美術的價値。

その他見る人の立場によりいろいろの效用も考へられるので、さうなると單なる兒童玩具にとどまらず大人のものとしての意義を持つのであります。

もとより北支郷土玩具の源流、傳統變遷の系統、日本玩具との關係に就ては、まだ何の研究もしてないので何處に如何なるものであるかを考現するだけでありますが、それも調査足跡不充分なのであり、決定的な判斷をするわけに行きません。

次に首題の通り玩具と云うても自ら封建的民藝（手工業）作品と資本主義的コムマアシアリズム（機械生產）作品とに分れますが、私は前者特に地方色濃厚な郷土玩具を取上げて行くことになります。

概　觀

一體に北支郷土玩具の在り方は、正月とか春先の廟會（廟會は特に玩具傳播の上に大きく働く）とか特別の時節を除けば、平常は大畧少い。

むろん日本の郷土玩具も明治以來、廢滅に近いのですが、とつて代つた新興玩具の量的發展は素晴らしいもので何處に行つても玩具や繪本を持たぬ子供は殆ど見當らぬ位である。

それを思ふと、中國の子供達は決して惠まれてゐるとは云へません。但し半封建的色彩のまだ濃厚な國柄であり又國民の大部分を占める農民達が保守的なのと、都會文化が日本程迅く地方に浸潤し難い事情などのため、まだ暫くは日本の郷土玩具の現狀より有望であります。

ともかく、玩具の少い理由は、何と云つても民衆の貧乏といふことでせうが、貧乏の割合に玩具はよく與へてゐると云ふことが出來ます。

地方的分布狀態は、大まかに分けて山東、河北、河南の平野地帶に多く、山西、蒙疆の山嶽高原地帶はめつきり少い。卽ち大行山脈によつて仕切られたやうな感じです。

各地方玩具の特色は日本程判然したものはない（これは陶磁も同樣の由）

何分歴史の古い圖柄だけに、いつのまにか地方文化の交流も行はれたと見えます。例へば政策的に各地物資の融通を計つた歴史あり、又廟會が古來物資交換の市を兼ねたこと、天災人災による住民の移動など。從つて玩具の交流も行はれたに違ひない。今度の旅行で泰安に行つた時、大分飛離れた傾向の玩具（山東系と見えぬ）を同じ店で發見して驚きましたが、泰安は天下の泰山詣で聞えた所だけに人形作者が他處から來て住みついたか人形を移入したものかと思はれます。

材料を見ると泥が最も多く次に紙、布。木、竹、ブリキ等は僅かなものです。この事は地方物産との密接な關係を示す證據であります。

特異性

第一ユーモアの事、これはよく國民性と通じてをります。無論日本のものにもあるけれども日本のは眞面目なものか氣張つたものが多い。同じユーモアでも中國のは野放圖なところがあります。

第二、道敎的要素が強い、玩具だけでなくすべての圖案意匠に見えるが、玩具も同樣福祿壽の緣起に因むもの、意匠が多いのです。又實際に娘々廟への子寶新顔に使はれる例を見ても明かであります。

第三、主觀的寫實、これは日本も同樣ですが、これは童心を育む情操教育に働きかける力となる。ただ原色——赤黄綠青など——を大膽而も效果的に使ひこなしてゐる點は日本ものの及ばぬところです。

第四、音を取入れたものが多いこと、例へば、泥娃々の大部分は笛仕込であある。これは音樂好きな國民性と考へ合せて面白く思ひます。

地方色

前記のやうにこれはあまり判然とすることは出來ませんが、

イ、山東系＝濟南、泰安、濟寧など
ロ、河北系＝天津、保定その他
ハ、河南系＝開封（新鄕は山東系に近い）
ニ、江蘇系＝徐州（但し未詳）
ホ、山西系＝太原

に分けて、各〻多少の特異點を持つやうです。此度歩いたところでは開封、太原のが判然と變つてをりました。特に開封のものは色彩、姿ともに風格があり、濟南のものと並んで北支玩具の大關格ではないかと思ひます。

最後に北京は種類、量、使用材料の多樣さから見て王座を占めますが、美術的質の問題として量との平均點をとるならば大層落ちるのです。この傾向は天津も略〻同じいので、即ち北京、天津のやうな都會に鄕土玩具を求めることは無理な註文になります。

しかし北京の一番北京らしい特色を發揮するのは正月前後の凧、花燈、仲秋節の兎兒爺、シンコ細工、影戯人形などでありませう。（濟南その他にも凧、花燈、兎兒爺、シンコ細工はあるにはありますが、その豪華さ或は精巧さに於て）倚ボロ布、ブリキ、紙屑など利用した粗雜な玩具の多いことも北京の經濟文化の有樣を反映するものと思ひます。

日本玩具の進出

他の商品と同じく、特に事變以來、めざましい發展を見せてをりますが、天津、北京、青島、濟南などの都市を初め、地方では厚和の玩具が殆ど北京ものか日本ものの移入でありました。

これは勿論日本の經濟からすれば嬉しい事に違ひない。けれども、その大部分がセルロイド、ゴム、ブリキ製の安物ばかりであるのは殘念です。

日本文化の薄手なところだけ見せつけるやうな（西洋文化の消化不良と、コムマアシヤリズムの功利性だけ發揮した）玩具は何とか遠慮改善してほしいと思ひます。（筆者は華北交通資業局員）

高度文化とハゲと腰曲り

中尾龍夫

そのかみ、初めてオヂサンと呼ばれた時、ドキンとして、オヤオヤもう俺もオヂサンかしら、と心ひそかに驚いたものだが、此の頃はどうやら、お巡りさんや兵隊さんの顏が、いやに子供ぽく見えて仕方がない。

徵兵適齢は、昔から滿二十歳といふに變りはなく、またお巡りさんにしても、明治の初年なら兎に角、戸籍のゴマかしのきかない昨今では適齢以下の者がある筈もないから、さう感じるだけ、こちらが老いたに相違ない。

人間といふものは案外簡單なもので自分の子供が小學生だと、よそさんの同年輩の子供だけが目につき、中學生の頃には中學生ばかりが目に映じ、上級學校の入學試驗を受けさせる頃になると、白線入りの帽子ばかりが目にうつり、いよいよ角帽といふ段になつてからは、アレは法學部生だ、アレは工學部だと、道行く制服の襟章だけが、親である人の鼻先に迫つて見える。

それも終つた此の頃では、誰と誰とが高文に通つたといふ位が話となり、知首相會した折にも、子供子供の就職談に花を咲かし、十年二十年後の彼等を想像しては、如何にも自分のことのやうに夢を見てゐる。

青年には夢が多いが、老人にも亦夢がある。想へば夢を食うて生きてゐるのは獏ばかりではないらしい。

老人にも詩があり、夢があるにはあるが、其の詩も夢も實は甚だ淡いものだ。ありていにいふと、毛三爺に似た頭となつては、オールバックもなければオールフロントもあり得ない。假りに北京の電燈が常に黄昏れのやうであるにしても、暗らいなどとはウツカリ云へない、誠に不自由である。

晩秋から初冬へかけての北京街頭で曆で云ふ所の日のいい日に、賑やかな多くの行列に行きあつても、赤い結婚の行列に接するより、白い葬式の行列に接した方が感懐が深い。まさに近火と云ふ所であるからであらう。

かくて、かかる人の眼が、北支に於けるハゲと腰曲りとに注がれたのは、蓋し自然であらう。抑もハゲは、誰が研究し誰が判定したのか知らないが、知識向上の一表現であり、高度文化の一象徵であるとされ、歐米人にハゲの多いのは其のためである。と云はれてゐる。

時節柄、フザケルなといつてやりたいが、犬、猫、馬、鹿のたぐひにハゲのないところを見ると或は然うかなとも想はれる。鳥類にもハゲがあり名づけてハゲタカといふが、アレは例外ださうである。尤も六法全書の法令中にさへも例外は澤山あるから、この點別に腹も立てず、暫く我慢することにして置く。

日本内地を見渡すと、幸か不幸か、高度文化の一象徵が非常に多く、東京を中心に成立してゐるハゲ同人の集りだけでも、或は滿月會、或は長壽會、或は篩月會などと稱する結社があり、別してソコに主義主張はないらしいが事變前までは、時々集つては、テレかくしにゲラゲラ笑つて過したものである。

しかし、昨今は流石に非常時だけあつて、寧ろヒゲの會にお株をとられ、ハゲ同好會或は同情會はこのところ數年間多眠を續けてゐる。

筆者は過去十年の間、朝鮮、滿洲、北支にかけ、折りに觸れては、深くハゲに留意して來たが、朝鮮にも滿洲にも北支にもハゲは甚だ尠なく、寧ろ見出すのに骨が折れた位である。さりとてハゲと高度文化を結びつける考へなどは毛頭ない。

現に北京城内にあるラマ廟雍和宮ではチョイチョイ蒙古産のハゲにめぐり遭つてゐる。昨今は雍和宮もさびれて、ラマ僧の數も清朝時代とは較べものにならぬが、ソレでもあの中に庵を結んでゐる僧侶がまだ百九十八名もゐる。

蒙古からの遊學者、旅行者などの滯在してゐる者を合せると常に二百五十名に近い。この少數蒙古人の中にもチョイチョイ相當なハゲを見出すところから考察すると、高度文化說を鵜呑みにはしかねる。

中國人の老齢者からハゲを見出すのは頗る困難であり、殊にともすれば剃頭してゐる手合が非常に多いので、ハゲの眞僞を識別するのは至難である。

しかし女性老人中からハゲを見出すことは極めて容易であつて、日本内地ではお目にかかれぬやうな奇怪な姿に往々遭遇する。

ここでもハゲ高度文化説は動搖させられてゐる。華北政務委員會の要人中にも一二のハゲが嚴存するらしいが、しかし男性中國人のハゲは割合にすくない。中國近代の元老格を一瞥しても、

曾國藩（六二）　左宗棠（七五）
李鴻章（七九）　張之洞（七一）
孫家鼎（八三）　陳寶琛（八八）
徐世昌（八五）　袁世凱（五八）
孫　文（六〇）

等々のお歴々にツルハゲはない。

お斷りする迄もないと思ふが、括弧内の數字は他界當時の年齢である。それにつけても、昨年末、百歳以上の高齢を保つて、北京の西城寶禪寺衚の倉頡廟で大往生をとげた翰墨家として有名であつた王顯翁がハゲてゐたかどうかを確め得なかつたのは遺憾である。

額に青海の波を漂へ、腰に梓の弓を張りと云ふ言葉は、一たい輸入語なのか、それとも和製文章なのか、其の點は明かにしないが、日本內地には、地面をなめんばかりの恰好で步いてゐる老人が男女性ともに相當にある。

とぼとぼ杖を頼りにではあるが、步いてゐるところをみると、體は健康であるらしいが腰が曲つてゐる。疊の上に坐る習性から來てゐるのかも知れぬが、この腰曲りを朝鮮、滿洲、北支に見出すことは先づ絶望といつていい。或はかかる姿になつた者は外出せぬことにしてゐるのかも知れぬが、筆者はまだ一度も見受けたことはないし、且つ寡聞にしても腰曲り存在說を耳にしたこともない。

中國人の腰曲りが絶無に近いやうに歐米人にも腰曲りはないらしい。先日、北京の外交衚東交民巷の一角で、オヤ毛唐の腰曲りらしいのに出あひ、オヤと思つて注意したところが、案に相違し彼女が佝僂病患者であることを發見して想はず苦笑した。

朝鮮の男性には多少あやしいのがあつたが、女性の腰曲りは先づない。朝鮮の女性は水汲みを初め、重い荷物を頭上に乘せて運ぶので、子供の時からピタリと腰を据ゑて常に上體を眞直にして步いてゐる。或はソレが老いても尙、腰の曲らぬ所以であるかも知れない、從つて朝鮮婦人の和服姿は、張り板に衣裳をつけたやうで、一寸どうかと思ふが、老いても腰の曲らぬ點は素晴しい。

古代希伯來の女性も水がめを頭で運んでゐたらしいが、今に傳はるヘブルやギリシヤの古代壁畫などに腰の曲つた姿を現したものはないらしい。

もし果して、頭で物を運ぶが故に、女性の腰が曲らぬといふなら、伊豆の大島の女性、京都北山あたりの女性中には腰曲りが殆ど居ないと云ふことにならぬと辻褄が合はなくなるが、まだたしかめてはみない。

老人にはハゲや腰曲りが多いが、ハゲや腰曲りは必ずしも老人の資格ではない、故西園寺公や故澁澤子の如きは死ぬまでピンとして居られた。

朝鮮の朴永孝侯の如きも、故人となる其日までぴんとして居られた。あの年でといふと氣にするかも知れぬが、羽左衛門丈の如きは舞臺に立たぬ時でもピンとしてゐるし、腰などはつとめてシヤンとしてゐようとする風さへ見える。いい心がけと謂ふべきである。しかし、日本內地に腰曲りが多いとは書いたが、人口が年々激增して行くにも拘らず、其の數は年々減じて行くやうに想はれる。

別に統計はないが、二三の人に感想を問うて見たところによると、腰曲り減少觀には、どうやら異論がないらしい。

してみると、ハゲと高度文化とは或は親密であるかも知れぬが、腰曲りの方は、高度文化のためにだんだん其の姿を消して行くらしい。

（筆者は北支開發勤務）

北京料理 冬の鍋もの

黄子明

涮羊肉

秋は烤肉、冬は涮肉。烤肉は卽ちヂンギスカン料理、そして涮肉（シヨワロウ）は羊肉のチリ鍋である。

前門外では正陽樓、同和、兩益軒、城内では東安市場の東來順、また西城で西來順、一畝園と云つた名のある羊肉料理屋で、俗に羊肉鍋子といふこの涮羊肉を冬の鍋ものの勢に數へたい。

小さいお碗に一種類づつ入れた藥味をいろいろとボーイが運んで來てテーブルの上に並べるのである。醬豆腐を溶かしたもの、胡麻味噌、油でいためた唐辛、蝦の油黄酒、醬油、酢、なかなか以て頗る大掛りな藥味である。

先づ醬豆腐を溶かしたものを二匙、胡麻味噌一匙、醬油を半匙、其他は好みに應じて數滴。これを碗に入れて雜ぜる。煮えた羊肉をこれにつけて食べるのであるが、藥味の調合ができた頃先づ鍋を持つて來る。

日本人が俗に中國の寄せ鍋といつてゐる圓型の銅壺式の鍋で、別に焜爐の必要はなく、鍋の中央に爐がついて、炭火がカツカと燃え、その廻りの汁が盛んに沸き立つてゐる。

次に羊肉の赤身や白身をとりどりに大きく薄く切つて、それを小皿に盛つたのや、見るからに美しくおいしさうな白菜を輪切りにしたのや、俗稱支那素麺といふ粉條や、蒜を蜜に漬けて飴々しく鼈甲色にした糖蒜などの皿を、鍋のまはりに並べてゆく。

これで仕度が整つたので、扨て喰べることになるが、先づ羊肉を三四切れ箸ではさんで鍋に入れると一二分程で程よく煮える。煮過すと肉が硬くなつて味が悪くなる。

そして、その肉を藥味につけて頬ばると、まるでフグチリの感じ、卽ち北京の羊肉チリと云つたところである。

かねてもつともらしく聞かされてゐた羊肉の臭味なんかいささかもなく、舌の上でとろけるやうな柔かさで、而も意外にさつぱりした淡い味ひはスキ燒などのコツテリしたものでは更々なく、思はず喰過るほどのものである。

涮羊肉

この涮羊肉をもう一入うまく食べるには別に蒙古産の口蘑と乾蝦とで味をつけた汁（タン）を命じて、それを鍋に入れさせることである。又、肉に箸をつける前、先づ以つて白菜を入れて置くのもよい。この白菜が又とてもうまいものである。

一皿か二皿か先づ肉を平げた頃合ひに改めて白菜を入れ、ざつと湯を通すといつた位の加減で摘み、これにまた藥味をつけて喰べ、更に大葱を一寸位に丸切にさせたものの程よく煮あがつた頃のうまさは堪らないものである。

蒜の蜜漬、卽ち糖蒜は合間合間に少しづつ齧ると、肉の消化もよくて風味のあるものである。

鐵鍋蛋

前門外は大柵欄、その中程の北側の露路に、厚德福といふ河南料理屋がある。芥川龍之介がたいへん好きで、日本人の支那料理通の間に名の響いた老舗である。チチハル、新京、奉天の厚德福の本家なのであるが……。この家の名代料理のうちに鐵鍋蛋といふのがある。これは眼の前でグツグツ煮る火鍋子などと違ひ、鍋のまま出す料理であつて、中味はただ卵だけ、それでゐて非常にうまいとされたものである。

鍋と云ふよりも深めの鐵壺と云つた方が適稱の様な鐵鍋で長い間使ひ古して煤と油でギラギラと何とも云へない色に染つてゐて、而もこの鍋は古ければ古い程風味があると云はれてゐる。

料理は、ちよつと見れば茶碗蒸しに似てゐるやうだが、これは蒸したものではなく、この鐵鍋ごと蒿火で壺燒きしたものである。また茶碗蒸しには鷄肉なり銀杏なり色々なものが這入つてゐるが、鐵鍋蛋はただ卵だけで、他に何もはいつてはゐない。それでゐて一體どうしてかうも風味が出るのか、その割烹の玄妙さに驚くほかはない。

厚德福は河南料理であるが、鐵鍋蛋だけは北京のみの持つ名料理である。

可園雜記

加藤新吉

吟に宜く繪に宜き可園の秋
風色月華羇愁を洵ふ
超覽す世波洶涌の外
茶を以て友を會す最も風流

雁字迢迢海天を渡る
飽霜の蘿壁夕陽に然ゆ
窗を打つ飄葉は凉雨の如し
燈火人を催して靈編を讐せしむ

東廊のポーチを出て右に折れる。落葉を踏む。築山の下の洞門をくぐる。そこに獨立の五間房子がある。ここに石の詩の作者、柔父松崎鶴雄先生が住んで居られる。

この五間房子は、昨年の秋松崎先生を迎へるまで私自身住んでゐた。東の二間は舊來の磚の儘で書齋、西の二間に床の間と押入とをつけて疊を十帖入れた。そこから手洗、風呂、便所へ續く。眞中の一間は通路。表の方の今私の住んでゐるところは昔の間仕切がすつかりなくなつてゐるが、この一間の兩側はほぼ昔ながらに殘つてゐる。美しい木組に紙を貼つた間仕切は風雅である。

南は小さな庭。別段の庭づくりはなくて向は高い土の墻、その向は帽兒胡同の通。中に一本の香椿がある。その梢が若芽を吹く頃になると庭一面ハナダイコンが紫の花をつける。花も葉も大根そつくりなのに根が太らないからさう名づけた。過日、京都大學の三木茂博士を煩はして可園にある限の木と草とに就いて敎はつたときには、恰も枯れ果てた後であつたので、來年の春にならねば正しい名は判らない。

可園の建物はたいてい南側に柱廊が附いてゐるが、ここは北が柱廊で南の軒先が比較的短い。だから、冬は窗一ぱいの陽、月夜には窗一ぱいの月影が樂しめると共に、ここに寢ると夜明が實に早い。雀の騒ぎに目をさますと南側一ぱいの窓の最も高いところに陽がさし初める。そこだけが茜色に染められてそれが次第にひろがる。內から透してみる窓の木組がそのとき特に美しい。雀がそこに群れて樂しい影繪をつくる。朝のもの賣が胡同を呼び歩くのは、それからずつと後のことである。

この建物は表の胡同から見えないばかりでなく、內側から見ても築山の陰にかくれてゐる。築山は石を積んだもので、それに使つた太湖石ははるばる太湖から運んだものと思はれる。權力か金力かがなければできない道樂である。宋が北方に都した頃、盛にこの石を運ばせたといふことであるが、その前の唐にも同じ好みがあつたらしい。先日、圖らずも故宮で乾隆御物の四朝選藻なる畫册を見る機會を得た。その中の李思訓筆と傳へる九成避暑圖にもそれが表はれてゐるのである。

支那人はどうしてこんなに石を積むことが好きなのか。私はまだ明答に接したことがないが、或は蓬萊を模し仙境に擬したものかと思ふ。道敎思想、不老長生の願望などと一脈のつながりをもつものかと私かに考へて居る。がそれはともかく、この一角は、表からも裏からも見えぬが、陽もさし月もさす、學者も訪ひ文人も訪ふ、敎を請ふ青年が絕えず來る、世波洶涌の外ではあるが巷と斷ち切られてはゐない。古稀の翁の住居として貧しいながらもふさはしい、と私だけは嬉しく思つてゐるのである。（筆者は華北交通資業局長）

支那關係圖書紹介 4

地方誌關係

支那地方誌の邦書も良書として賞めつぱなさせるのは却〻見當らぬ。既に述べたクレツシイやカザーニンのもので、地方誌の部分は矢張り大衆向である。その外のを取り上げてみると、最も簡單なものでは國松久彌氏の**新支那地誌**――古今書院發行――がいいと思ふ。體裁の好い本で氏の多作の著書の中最も佳作である。或る特殊の土地に關する事に就いて見ようといふことは勿論今の論題の外になつてゐるから、ざつと支那地方誌を大觀する場合右の書を御薦めする。同書には支那の地理的な概論も摘要風にまとめてあつて便

をそのまま援用してあるのは、遺憾至極である――例へばクレツシイの南北支那の比較の項の如き――。所謂ブツクメーカーの敢へてする落度である。

これ等より稍〻頁數の多いもので、西田與四郎氏の**中華民國地誌**――古今書院發行――がある。これは事變前の出版であるが當時に於いては最も手際のいいものとして推すべきであつた。

又佐々木清治氏の**北支那の地理**――發行所同前――は事變直後一番早く出たものであつて、總論の部分は資料極めて不揃ひではあるが一應の參考になるだらう。その地誌の記載は簡潔で國松氏のと大差ない程度である。西田氏は支那の一部を旅行したことがあるが右二氏は共に支那を見てゐなくてあまり多くもない手許の圖書に依つて作り上げたものと思はれる。專門的に見れば支那地誌の資料も却〻日本の先生に利用されてゐないのが、あまりに多い。更に詳しい程度に屬するものに於いても同樣のことは言へる。最近出た富山房の**滿洲支那地理歷史大系**の支那地誌の部も急に間に合はせたもので書きつぶりも面白くない。西山榮久氏の**支那**

でに書かれた右の階級の本は、ネタがあまりに單一すぎる。もつと支那全域を實際に研究して而も新しい手法でこれを大衆にまとめて書いて見せる先生は、これから後に望むべきであらう。今頃北支を旅行に來る先生達にしても戰線の彼方は見得ないのだからあまり大きな顏は出來ない。彼等は六盤も秦嶺も見得ず、四川、雲南も詮めねばならぬ。これが他の科學だと支那人や毛唐のものを拜借しても間に合ふことがあるが、地理の方では支那は新しい呼吸を體得してゐなかつたし、從つてその記載は其のまま拜用すると西山榮久氏ばりのものになり、毛唐も有能で新しい地理を身につけたのは數へる程しか步き廻つてゐない。

尙外では改造社の地理講座の〝**支那**〟もある。以上でテキスト風の參考書は切り上げて、も少し軟いものとなると、後藤朝太郎氏の**支那風土記**や、これに類するものがあるけれども智識が低調過ぎる。此等と前記テキストとの中間的なものに**世界地理風俗大系**がある。筆者が一寸古く內容に不安が伴ふが代りに時勢柄その編輯ぶりが羨ましい。

範疇にこだはらず可なりにかうした方面の需めに滿足を與へることだらうと期待される。

以上は大體の概觀をするための地方誌であるが或る省、或る都會に就いて豫備智識程度のことが得たいと思はれる場合は矢張り今の處では同文書院の**省別全誌**――目下丸善より新版賣出中――又は西山榮久氏の**大支那地理**程度のものがある外は、あまりない。ただ山西省では**山西大觀**といふのが目下賣出されてゐる。

昭和十六年十二月十五日印刷納本
昭和十七年一月一日發行

一月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房 振替東京六四二三三番 電話九段(33)一四一五番・三三四四番
會員登錄番號一二六五〇八番

一册定價(特)三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社
廣告取扱 大阪市西區京町堀上通一丁目二五

ムナバールは化學的に合成したる有機硫黃化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮內に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。

【特徵】

一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。

一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。

一、品質純良にして約二六％の硫黃を含有す。

適應

扸癬・頑癬・濕疹一切
白癬・水蟲・面皰・汗
疱・陰囊頑癬・皮膚化
膿疹・傳染性膿疱疹・
皮膚瘙痒症其他寄生性
及瘙痒性及皮膚諸疾患

包裝

一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）

製造發賣元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町

一手販賣元 株式會社 稻畑商店
大阪市南區順慶町二丁目

日染
ムナバール

利であるが、ただ惜むらくは引用の原書の原文によらず、邦譯の誤つたものま

經濟地理の地誌の部も支那の某書の全譯に近い。專門の方から見れば今頃ま

尤も華北交通會社で目下計畫中の**北支案內記**の如きは、從來の案內記といふ

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年十二月十五日印刷納本 昭和十七年一月一日發行（毎月一回一日發行）第三十二號

北支 ㊄ 定價 三十錢